

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.20

⇒をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ IT進化の中で思うこと

叶 秋男

(学術資料部長・教育能力開発センター教授)

⇒ 北陸大学生に薦める本

⇒ ミュンヘン大学化学・薬学部図書館

安池 修之

(薬学部講師)

⇒ 手紙のススメ

中條 良美

(未来創造学部講師)

⇒ リアルスリル・グリーン(製本雑誌)

石田 一海

(大学院薬学研究科 博士前期課程 1年)

⇒ 素養と読書

呉 松花

(法学部法律学科 3年)

⇒ 編集後記

⇒ 目次

HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報
2nd-Half 2005



IT進化の中で思うこと

学術資料部長・教育能力開発センター教授 叶 秋男



近年の情報分野における驚異的な技術進歩は、数十年前の未来学者の予測をも上回って進展している。例えば、われわれに身近な教育の現場でも、教員ばかりでなく、学生にとっても、学習、資料の収集やデータの分析、文章作成、そして、発表方法にもパソコン等のハイテク・デバイスとインターネットに代表されるソフト群は欠かせないものとなっている。このように学習・研究スタイルが根本的に変化する中で、当然大学図書館に対するニーズも変わり、専ら専門図書を収集し閲覧させる旧来の機能だけでは不十分になってきた。

IT先進国米国の多くの大学図書館では、20年ほど前から、学習・研究スタイルの変化とともに、大学図書館の利用率の低下と授業との関連性の希薄さが目立つようになり、図書館の生き残り策として情報リテラシー教育プログラムの導入などが提唱されてきた。確かに、今日では本学の図書館の場合も、学生に最も利用されているのは、図書そのものではなく、パソコンであり、ソフト面ではインターネットであり、映像資料の詰まったCDやDVDの類である。こうした情報機器類の利用現状をみると、図書館主導の情報リテラシー教育が必要とは思えない。むしろ大事なのは、これまで分離していた情報センターと共同して、提供できるソフトの充実を図ることだといえそうである。

ところで、本学ではアルベス・システムが導入され、繰り返し講義を見ることができるようになり、クレバーハウス（本学図書館）でも学生がパソコンの前で再視聴している姿が珍しくなくなった。教員の立場からすると、講義をそのまま再生されることには正直抵抗がある。もう少し体裁を整えて書籍化できたら、という切なさに悩まされるのに似ている。

しかしながら、講義内容が難しくなればなるほど、学生に繰り返し講義を視聴したいというニーズがあることも明白である。そこで、今後の大学図書館の在り方とかかわることだが、教師が講義ノートを書籍化するのと同様に、録画された講義をそれなりに編集してDVDを図書館において利用できるようになると教員・学生双方にとって好ましいのではないかと思う。

なぜ筆者が手間ひま掛かる編集にこだわるかといえば、もしも講義が外部にネット配信されるような場合、授業内容が著作権やプライバシーに抵触しないか、のチェックが必要だし、視覚教材の要件として欠かせないのは視聴者にとってのわかりやすさであり、その視点からも客観的に編集されるべきだからである。ただし、そうしたソフトが利用できるように、肝心の「ライブ」講義を聴く姿勢や出席率が低下したのでは教育上本末転倒であろう。そのためにも、音楽ライブの醍醐味が演者と客の共鳴であるように、実際の講義が教員と学生の共感共鳴の場ではなくてはならないだろう。

北陸大学生に薦める本

◆園山春一 教授

『十五少年漂流記』 ジュール・ヴェルヌ著 角川文庫

冒険心とチームワークのすばらしさを教えてくれる。

『ビルマの豎琴』 竹山道雄著 新潮文庫

戦争を考えさせてくれる。

『守銭奴』『人間嫌い』など モリエール著 岩波文庫ほか

フランスの喜劇作家。フランスのシェイクスピアと呼ばれる。人間の真相を追究、現在にも通じる人間風刺。

『王道』『人間の条件』『希望』など アンドレ・マルロー著 集英社ほか

フランスの元文化大臣。インドシナ、上海、スペインの内乱、戦争を通じて体験と行動を文学に結びつけた傑作。

◆三浦 泉 教授

『江戸の養生所』 安藤優一郎著 PHP文庫

現在、わが国が抱える問題の一つに、医療（看護、介護を含む）があります。医療は時代を越えて注目されていたことは否定できません。遡れば、江戸時代でも病人をどうするかは政治的にも重要なテーマでありました。時は、徳川吉宗（1716～1745年）、大岡忠相の頃、今でいう医療は、養生という考え方が強かったと思われれます。なぜなら、貝原益軒著の「養生訓」（1713年）がよく読まれ、今でいうベストセラーであったことでも「養生」の語が定着していたと考えられます。本書は、小川笙船という町医者しょうせんが、幕府政治に関する意見書（施薬院の設置を求めた内容）を目安箱に提出したところから「小石川養生所」の開設と、その活動の経緯について興味深く書かれてあります。一読をすすめます。

『冬の鷹』 吉村昭著 新潮文庫

本書は、「解体新書」（1731年）を翻訳した前野良沢、杉田玄白をはじめとする5人の協力者によって完成するまでの事実を小説という手法により感動的に読ませてくれます。

解剖書のターヘル・アナトミアの日本語への翻訳は、オランダ語の習得からはじまる困難な作業でした。前野良沢と杉田玄白を対比しつつ小説は展開されますが、前野良沢の一途な学究への姿勢に、この作家は心が惹かれていくのをよく読みとれます。

「解体新書」は杉田玄白が翻訳したと、私達は習ってきましたが、前野良沢なくして、わが国近代医学の礎を築いた「解体新書」は生まれなかったことを、この小説は教えてくれています。

『蘭学事始』 杉田玄白著 講談社学術文庫ほか

本書は「解体新書」が翻訳完成するまでの経緯を、杉田玄白83歳の時に書かれたものです。その内容は、吉村昭著「冬の鷹」に小説ではありますが、この「蘭学事始」（1815年）をベースに書かれています。

私が、今、なぜ「冬の鷹」「蘭学事始」「解体新書」を学生諸君に読んでもらいたいと推薦するのは、江戸時代にわれわれ先達が「誠に艦舵なき船の大海に乗り出せしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、ただあきれにあきれて居たるまでなり」とターヘル・アナトミアを前にして語ったけれど、日夜一途に翻訳に没頭し完成させた姿勢を知ってほしかったからです。

※「解体新書」の覆刻版（講談社 昭和48年6月1日発行）がライブラリーセンターに所蔵されています。

◆叶 秋男 教授

『亡命ロシア人の見た明治維新』 JI・II・メーチニコフ著／渡辺雅司訳 講談社学術文庫

維新直後の日本に関する、ロシア東洋学者による比較文化論であり、日本語を身につけて来日し、意欲的に日本体験をし、日本を知ろうとした著者の姿勢を学ぶことも意義があります。

『市民の国について』 D・ヒューム著／小松茂夫訳 岩波文庫

近代を形成した市民社会の政治経済に関するヒュームの七編の古典的エッセイ集。近代というものを考える際に哲学的土台を与えてくれる一冊といえます。

『会社はこれからどうなるのか』 岩井克人著 平凡社

「会社とはなにか」、「産業社会はどう変化しつつあるのか」を平易に叙述してあり、就職の前に是非読んで将来進路の参考にして欲しい本です。

◆櫻田芳樹 教授

『中国の歴史04 三国志の世界（後漢三国時代）』 金文京著 講談社

中国小説の研究者金文京氏が、正史『三国志』とお馴染みの小説『三国志演義』読み比べた特色のある歴史記述、惹句に「乱世の実像と煌き」とあるのも大げさでない。

『二重言語国家・日本』 石川九楊著 NHKブックス

言葉が思考を形作るなら、日本文化の原型は漢語・和語の混成にあること、『古事記』『日本書紀』『万葉集』の昔に遡る。我々の思考は漢語と和語のダブル・イメージの投射の上に結ばれる映像だ。そこに日本語の有利も不利もあり、その土台に文化が乗っていることを明晰に解いている。

『日本企業がなぜ中国に敗れるのか』 莫邦富著 新潮OH文庫

家電機器 テレビ・冷蔵庫・洗濯機・クーラーは既に中国国産メーカーが世界企業になり、何でも日本と合併の時代は終わった。携帯電話はモトローラー、ノキアがシェアを占め、日本は中国市場で後塵を拝している。日本の国際化に欠けたものを明確に指摘している。

◆姜 英之 教授

『森信三・魂の言葉』 寺田一清著 PHP研究所

人生をどう生きたらよいのか。永遠のテーマである。本書は傑出した教育家であった森信三氏の思想と実践を通じた珠玉の言葉を365話としてまとめられたものである。生きる自信を失った人、人生の目標が定まっていない人、より良い人生を求める人にとって、「二度とない人生」をいかに前向きに、充実して生きていくか、素直な気持ちで教えられる座右の書である。

『人生論』 トルストイ著 米川和夫訳 角川文庫

ロシアが生んだ世界最高の文豪といわれるトルストイは、『戦争と平和』など不朽の名作を残して有名であり、そのスケールの大きさは他の作家の追随を許さないほどであるが、彼自身は死ぬ直前まで「生と死」の間で葛藤を続け、矛盾に満ちた人間のありように苦悩したとされる。大作家に似つかない淡々とした語り口の本書を読むことで、「生きる」勇気を与えられる。

『「アジア」の世紀』 亜洲奈みづほ著 中公新書

日本人はアジア人であるのか、西洋人なのか。もちろん前者であることを否定する人はいないだろう。だが、多くの日本人にとっては近隣のアジアよりも欧米に対する知識がもっと豊富で、親近感も強い。「韓流ブーム」や中国経済の台頭でアジアが見直されているが、本書を読むことによって、「強く魅力的なアジア」を発見することができ、「日本人の自己回復」につながる。

◆ライブラリーセンター

『未来免疫学』 安保徹著 インターメディカル社

晴れた日には虫垂炎患者が増加。それは人間の血液の中の顆粒球とリンパ球のリズムである。

『バカの壁』 養老孟司著 新潮新書

ベストセラーとなった基礎的な哲学書である。本書は公務員試験の文章理解に出題される可能性が高い。

『郵政省解体論―「マルチメディア利権」の読み方』 小泉純一郎, 梶原一明著 光文社

『官僚王国解体論―日本の危機を救う法』 小泉純一郎著 光文社

今は時の人、小泉首相が10年も前から掲げていたテーマである。小さな政府、政治主導、地方分権の推進等について再読する価値は高いと思われる。

『聖書』『ギリシャ神話』

この二冊を読んでおけば、世界の宗教・映画・芸術・文学・生活などへの理解が一層深まる。

「北陸大学生に薦める本」は、以下のように、ライブラリーセンターに所蔵されています。

書名	請求番号	配架場所
十五少年漂流記 (角川文庫)	953/V 62	センター2F
ビルマの豎琴 (新潮文庫)	913.6/Ta 68	センター2F
	913.6/Ta 68	センター4F 未名文庫
守銭奴 (岩波文庫)	952/Sh 99	薬学4F
(世界文学全集 III-6巻に収載)	908/Se 22/3-6	センター4F
人間ざらい	952/Mo 22	センター2F
王道 (集英社ギャラリー「世界の文学」8巻に収載)	908/Sh 99/8	センター4F
(集英社版世界文学全集80巻に収載)	908/Sh 99/80	センター4F
人間の条件 (新潮文庫)	953/Ma 57	センター4F 未名文庫
(現代世界文学全集 23巻に収載)	908/G 34/23	センター4F 未名文庫
(大陸文学叢書 3巻に収載)	908.3/Ta 23/3	センター4F
希望 (世界文学全集 41巻に収載)	908/Se 22/41	センター4F
江戸の養生所 (PHP新書)	498.16/E 24	センター2F
冬の鷹 (新潮文庫)	913.6/Y 91	センター2F
蘭学事始 (講談社学術文庫)	402.105/R 14	センター2F
(岩波文庫)	402.105/R 14	センター2F
亡命ロシア人の見た明治維新 (講談社学術文庫)	210.61/B 63	センター2F
市民の国について 上・下 (岩波文庫)	133.3/Sh 48	センター2F
会社はこれからどうなるのか	335.21/Ka 21	センター3F
中国の世界04 三国志の世界	222.01/C 62/4	センター2F
二重言語国家・日本 (NHKブックス)	810/N 73	センター2F, 薬学3F
日本企業がなぜ中国に敗れるのか (新潮OH文庫)	545.88/N 71	センター2F
森信三・魂の言葉	159/Mo 64	センター2F
人生論 (角川文庫)	984/To 47	センター2F
「アジア」の世紀 (中公新書)	302.2/A 27	センター2F
未来免疫学	491.8/Mi 49	薬学4F
バカの壁 (新潮新書)	304/B 14	センター2F, アネックスファーム2F
郵政省解体論	317.26/Y 99	センター3F
官僚王国解体論	312.1/Ka 58	センター3F
聖書	193/Se 19	センター2F, 薬学4F
ギリシャ神話	164.31/G 47	センター2F, 薬学4F

ミュンヘン大学化学・薬学部図書館

Fakultätsbibliothek von Chemie und Pharmazie in
Ludwig-Maximilians-Universität München

薬学部講師 安池 修之



小学生の頃の私は、学校帰りに週刊コミック誌を立ち読みするのが日課だった。初老となった今は、本学の図書館に通い、新着の学術雑誌に目を通し、最新の学術情報を得ることが楽しみの一つになっている。そんな私がミュンヘン大学理学部化学科に2004年2月から2005年1月までの1年間留学する機会を得た。

ミュンヘン大学は、ドイツ連邦共和国バイエルン州々都であるミュンヘン市にあり、医、薬、理学部をはじめ約20の学部を擁する1472年に創立された伝統校である。また、同大化学科では、リービヒ冷却器を発明したJustus von Liebig教授や1905年にインジゴの合成でノーベル賞を受賞したAdolf von Baeyer教授が在籍し、同科は、薬学部生やその関係者にはとても馴染みの深い学科といえる。

数多い学部学科の中で、同じキャンパス内には理学部化学・生物学科と薬学部があり、図書館はこれらの学生・教職員が利用する書籍を主に所蔵している。建物は自然光を多く取り入れるためにガラス窓が多く採用され、白を基調とした室内に開放感を出すための吹き抜けが設けられ、モダンな図書館となっている。学術専門書約6万冊、博士修士論文約6千冊、化学・生物・薬系学術雑誌約200タイトルを納める。開館時間は、月曜から金曜日の8:00から18:00までとなっていた。時間外でも、学生、教職員IDカードを所定の場所に通すだけで、鍵が開き、入館が可能となり、結果として365日24時間の図書館の利用ができる。

このキャンパスは、1996年にハイテクキャンパスとして新たに建設されたものである。図書館も、その一翼を担い、学内LANを介して電子図書館(Elektronische Zeitschriftenbibliothek München)が開館されている。私が最も利用したのは、SciFinderでの検索とそれを介したWeb上の学術論文へのリンクによる文献の入手であった。学術雑誌の約80%はこのシステムが利用でき、研究室にあるPCから図書館に足を運ぶことなく、簡単かつ速やかに必要な論文を見ることができる、と同時に印刷や保存することもできた。このシステム



ミュンヘンでは珍しい桜並木のある化学科棟



新着学術雑誌閲覧コーナー
(正面書架に約200タイトルが並ぶ)

を利用して、博士課程の学生が日本の特許（日本語）の写しを手に入れ、その内容を訳してほしいと数回頼まれたことを記憶している。また、年代の古い資料や一部Web上でリンクできない資料は、所蔵雑誌タイトル数が多いために図書館に行けば入手が可能で、留学期間中に文献請求を外部に依頼したことは無かった。SciFinderを利用した文献検索は、学部教育にも取り入れられている。3年次生の学生実習では、指定された有機化合物を検索、文献入手、合成、構造決定するプログラムもあった。SciFinderでは簡単に構造、反応、人名、キーワード等、多方面から文献を検索できる。図書館のPCルームや研究室では、遊び感覚でそれを利用している学生達の姿をよく見かけた。

図書機能のみならず、このキャンパスには、様々な施設が備えられていた。学生実習の説明では、実演する操作の拡大映像をスクリーン上に映し出し、細かな手元の操作などもすべての学生が見ることができた。不活性ガス（窒素、アルゴン）やイオン交換水は集中管理の元で供給され、各実験台、ドラフトでは、常時利用可能であった。キャンパス内にガソリンスタンドのような有機溶媒施設、液体窒素供給施設、繁用される試薬のストックルームが有り、必要時に必要量のみを容易に補充することができた。学会発表用などの資料は、原稿をメール送信するのみでポスター（Aゼロ版）、スライドに変換、作成してもらえる。図書館をはじめとする施設の充実が、教育研究を力強く支援しているように感じられた。

小学生の頃、携帯電話やパーソナルコンピューターは、存在しなかった。私は、アナログ人間のためか、パソコン画面上での文章の読解力が極めて低く、紙上にプリントされたものでないと理解が容易でない。ミュンヘンの爽やかな空気の中、図書館で新着雑誌を手にとって目を通していた時間が心地よく、良い思い出となっている。また、学術雑誌に掲載された本学薬学部教育職員や友人の論文を、遠く離れた地で目にしたときは、無言の励ましを受けているように感じた。

最後に、本留学は、北陸大学海外留学助成の支援の下で行われたもので、この場を借りて関係各位に改めて感謝申し上げます。

北陸大学関係の本

『明清呉語詞典』	2005.1	上海辞書出版社発行	949頁 (姉妹校・蘇州大学との共同編纂)
『北陸大学三十年史』	2005.6.1	北陸大学発行	425頁



明清呉語詞典



北陸大学三十年史

手紙のススメ

未来創造学部講師 中條 良美



ことしは三島由紀夫が、あの壮絶な死を遂げてからちょうど35年にあたる。秋には晩年の名作『春の雪』が、妻夫木聡と竹内結子の共演で映画化されるなど、なにかと話題になっている。三島の作品は、思想の難解さだけでなく洗練された描写の透徹によって、…要するに読みにくいというイメージがある。おそらく本学の学生でも、ファンは少ないだろう。

しかし、腰をすえてじっくり読むと、彼の作品はかなり面白い。それも「笑える」という意味で。人間観察を徹底した三島だからこそ、笑いのツボも押さえていたのだろう。なかでも一読をお勧めしたいのが、『三島由紀夫レター教室』（ちくま文庫）。私はあまり筆まめなほうでないが、この本にはとりわけ惹かれるものがあった。下手なお笑い番組より笑えたのと、人生の処世術とでもいうような深いメッセージを感じる一冊だったからである。

まず、コンテンツがなかなか刺激的である。一部を拾い出すと、次のとおり。

肉体的な愛の申し込み、
 心中を誘う手紙、
 真相をあばく探偵の手紙、
 裏切られた女の激怒の手紙、…

一度手に取って読んでみたくなるではないか？もちろん、現在のような携帯メール全盛の時代に手紙なんて古臭いと思われるだろうし、私だって簡単な漢字を思い出すのに四苦八苦するほど鉛筆を握っていない。しばらく前に、手紙を主題にした辻仁成の『愛をください』がドラマ化されたが、これも手紙をブームにするに至らなかったことも思い出される。ここでは『レター教室』を教科書に、手紙というより、少し硬い表現で言えば、コミュニケーション戦略とでもいうような、生活上の技術についてお話したい。

唐突だが、皆さんはラブレターを書いたことがあるだろうか？メールでの告白でもなんでもよいが、どんな殺し文句が一番効果的かは、じっくり考えてみる価値がある。だれもが仲良くなりたいたばかりに齷齪するわけだが、文面で伝えようとすると、ちょっとした論文を書くより難しい。どんな形であれ気持ちが伝わればよい…そう思った方はまだまだ甘い。気持ちを綴る際に、存外ミスしがちなのが、逸る気持ちにまかせてつい自分のことばかり話してしまうことだ。相手の好意を得たいなら、己のことは黙して語らず、ただ相手の魅力だけをサラリと書き並べることが肝要だ。

要するに褒め殺しするくらいがちょうどよい。目でも鼻でもよいが、褒める焦点はなるべく個性的なほうが喜ばれる。これも『レター教室』の教訓のひとつ。当たり前と思われるかもしれないが、実はそうでない。というのは、自身の経験を滔々と話すひとに多いが、このひとは私がその時点でもう彼（彼女）に

関心を持っていると考える。たとえば、「昨日、高校時代の友達に会って、しかじかの話をし、どこどこで…（10分ほど続く）」。こんな話をいきなり持ち掛けられても、私は彼（彼女）のバックグラウンドに興味はないし、共通の友人があるわけでもない。一事が万事、自分にとって楽しかった思い出が他人にとっても楽しいというのは、ずいぶん乱暴な押し付けである。私もこう見えてなかなか忙しく、余計な詮索をめぐらす暇などないからだ。

取り付く島もないようだが、現実とはドライなものだ。世の中の人間は、皆思い思いのベクトルを持っており、それに従って、てんでんばらばらな方向に向かっている。無数のベクトルから交点を見つけ出すのは、当たるまで宝くじを買い続けるより根気が要るかもしれない。それより、他のベクトルをこちらのベクトルに引き寄せてみてはどうか？ 一口に言うが、むろんそんな簡単な話ではない。ところが『レター教室』では、その手段（あるいは話題）をきっぱり4つに限定している。

- ①大金 ②名誉 ③性欲 ④感情

なんともあからさまだが、①から③は相手の欲望を満たささえすれば、取り立てて努力せずとも関心を引くであろうから、納得できないでもない。問題は④で、心を持つ言葉など、古今東西を問わず見つけにくいものだ。それでもひとつ言えることがある。「他人に関心を持つのはよほど例外的だ、とわかったときに、…人の心をゆすぶる手紙が書けるようになる」（221頁）。正面切って認めたくない事実だが、そんなものなのだろう。むしろ腹をくくって冷静に相手を分析し、適度な距離感を保って付き合ったほうが、気持ちのよい人間関係を築けるかもしれないではないか。我々は、①から③のようにお互いの利害が簡単に一致する場合を除いて、「他人は決して他人に深い関心を持ちえない」（217頁）という苦い哲学を知るべきである。それは、「冷淡」とかいう言葉とはほど遠い、人とかかわる上での最低限のエチケットにほかならない。

ライブラリーセンターの蔵書検索について（高機能検索と簡単検索）

ライブラリーセンターに所蔵している資料を検索するときには、CARIN（カリン）の蔵書検索画面で調べます。ライブラリーセンターホームページまたはOPAC（検索用端末）の検索画面は、最初（図1）のようになっています。ここでは、探している資料のタイトルや著者がはっきりわかっている場合には便利ですが、曖昧(あいまい)な時には（図2）の簡単検索を試みましょう。思いつくままにキーワードを入力していただくだけでOKです。キーワード間にスペースを入れるとAND検索になりますが、OR検索、NOT検索やそれらの組み合わせも可能です。ヒント表示をクリックすると、詳しい検索式の作り方が表示されます。

（図1）



（図2）



ここをクリック
(ヒント表示)

リアルスリル・グリーン（製本雑誌）

大学院薬学研究科 博士前期課程 1年 石田 一海



大学の図書館で“謎”に思っていた本がある。あの緑の表紙の分厚い本だ。螺旋階段を登ってすぐ右手と左後ろ奥にある本。一般図書や専門の雑誌よりも多く、しかも殆ど見ている人がいないように錯覚した本。そして、あの存在感。当時の私は、手に取る事はなかった。なぜならばそれが、英語のタイトルだったからだ…。

その緑の本の正体を知ったのは、学部4年の講義の時間だった。その緑の本は「左後ろ奥」が“Chemical Abstract（ケミアブ）”と呼ばれる有機・化学合成系の化合物についての索引集。そして、「右手」が専門誌のバックナンバーを製本したもの、いわゆる“文献”だ。その講義のときにはケミアブを使ったが、これでもうこの緑の本に触れることはないだろうと思っていた。しかし、今年も大学院生として、この大学に籍を置くことになった。そして、「右手」の緑の本にお世話になる機会が出てくることになった。

大学院生の醍醐味^{だいご}といえば、“研究”をじっくりできるということだ。学部生のときに行うものは“実験”であり、“研究”とは違う。“実験”には実習書があり結果も十分にわかっているが、“研究”には教科書もなければ結果も予想できても確かなことはわからない。私の先生に結果についてたずねると、「出たものが真実です。」と、よくおっしゃる。この言葉は、正しい答えなのかは別としても、自分の出した結果に責任を持つ必要がある、という意味だと思っている。責任を持つためにも、何か頼るものがないかといえばそうでもない。そう、“文献”がある。文献には教科書に載る前段階の新たなことや、その文献を書かれた先生の考えなども書かれているので、自分の研究の参考にすることができる。“文献を読む”これも醍醐味^{だいご}の一つである。文献を手に入れるための手段として、「Pub Med」を利用する手がある。PCからPub Medに接続すれば、文献検索ができる。ここでお目当ての文献が見つかったところで緑の本の登場か…と言いたいところだが、もう少し後になる。問題はその文献の載っている雑誌にある。大学でその雑誌を講読しておれば、緑の本の登場となる。バックナンバーから探すのだ。だが、そうでないときには真打、「マイカリン」の登場となる。「マイカリン」とは、北陸大学ライブラリーセンターが行っているPCから文献の複写依頼などのできるサービスのことである。これを利用することで、緑の本を補完でき、お目当ての文献を手にする事ができる。

院生となった今、文献もそうだが、専門書を見に図書館に行くこともあり、かなり頼りにしている。私の院生生活とは切り離せなくなりつつある。これからも図書館に足を運ぶ機会は増えていくだろう。しかし、ひとつ克服しなければならない重要な問題がある。それは、英語への苦手意識。文献を読む醍醐味^{だいご}も、これがあっては醍醐味半減。辞書を片手に緑の本から得た文献を読み進めるも、実際読んでいるのは辞書なのか…？そんなことを少しだけ思いながら、今日も辞書を練っている。

素養と読書

法学部法律学科 3年 呉 松花



私の知り合いに、医科大学を卒業して病院で整形外科医をしているエリート女性がいます。そんな彼女が、以前、自分の学歴は高校だと語ったことがあります。大学での5年間は専門的な勉強ができただけで、素養は高校レベルに止まっているとのこと。当時はその意味が理解できなかったのですが、最近になってやっと彼女の言おうとしたことが分かったような気がします。

人間は生活していくための手段としての専門知識だけでは自己満足できないものです。自覚しているか否かはともかく、豊かな人間性の持ち主になりたいと誰もが思っているはず。そのためには素養を深める努力が必須ですが、彼女は大学時代にそれを怠ったので、残念に思っていたのです。

もちろんこれは私の推測です。留学をしてカルチャーショックを受け、高い素養を持つ人間になりたいと思っている私自身のことからの憶測にすぎないかもしれません。

素養を深めるために欠かすことのできないのが読書です。

最近、趣味が読書だと言う人が減ってきたような気がします。私自身も、趣味が読書だと大声で言えなくなってきました。目覚しく発展しつつあるIT世界で生きている若者として、趣味が読書では、時代遅れの感じがするからです。しかし、慌ただしい生活の中で、心のどこかが空いているように感じたり、空回りをしていて一歩も前に進んでいないと心を痛めたりするときに、静かに心を満たしてくれたり、優しく癒してくれるのは、やはり書物しかないと思います。少なくとも私の成長の過程で、本は欠かせない存在でした。

私の読書は、小学校1年の時の『アンデルセン童話集』から始まりました。分からない言葉がたくさんありましたが、何日もかけて最後まで読み終わりました。それらの物語の神秘的な世界に強く惹かれ、小学校3年くらいまで『グリム兄弟童話集』、『千一夜物語』、『西遊記』などの童話や物語を次々と読みました。小学校5年生になってからはイギリスの推理小説に惹かれました。お昼休みにもぎりぎりの時間まで読んでいて、学校に遅れそうになっていつも走っていました。また、友達と自分だけが分かる暗号を作って遊んでいました。

中学校では、『紅樓夢』、『三国志』、『水滸伝』など中国の古典に目を向けるようになり、『西遊記』と合わせて四大古典を一通り読み終わりました。特に、『紅樓夢』は2回も読み、テレビドラマも、映画も見ました。また、真似をして友達と作詩したりもしていました。

当時、家には大きな本棚があって、両親の学生時代からの書物が並んでいましたが、休みの時、特に、夏休みは、それらの本を読むのが日課でした。涼しい家の中でページの間から静かに流れる時を感じ、幸せいっぱいでした。その本棚の哲学関係以外の本を読み終わったときは、寂しい感じがしてなりません。

その後は、外国の名著を読んだり、内外の人物伝記を読んだり、台湾の恋愛小説に夢中になったり、香港の小説に没頭したりしていましたが、一番好きだったのは、40年代上海の小説家、張愛玲の作品でした。60年もの時が流れた現代の社会が、彼女が生きていた当時の社会に逆戻りしたように思われてショックを受けたこともありましたが、よく考えると、人間は人間である以上、その気質もそんなに変わらないはずだし、社会は螺旋状に発展するものと教えられ、理解いたしました。

本は長い間私の友でありました。そして、他者と違う自己を築く過程で本は大きな役割を果たしてくれました。善悪美醜の分別ができ、正常な心を持てるように育ったことでそれらに感謝しています。これからもよろしくお願ひしたいと思います。

ライブラリーでアルバイトを始めてから、本は私の仕事の対象にもなりました。このアルバイトは、本を預かること以上に光栄な仕事と思ひ、毎日温かく図書類を送り迎えしています。ライブラリーセンターの本が少しでも手助けになりますように、皆様のお越しをお待ちしております。

Lexis Nexis Academic (レクシスネクシスアカデミック) の利用について

Lexis Nexis Academicは、ニュース、ビジネス、法律情報、知財、医薬情報など約5900種類の情報源にアクセスできるオンライン情報データベースです。主に英文のドキュメントですが、フランス語、ドイツ語、スペイン語など多言語媒体も収録されています。データベースは毎日更新されていますので、常に最新の情報を入手できます。

例えばこんなことができます。(1) 日本人大リーガーの記事を、New York Timesで読む。(しかも時差なしで！) (2) 海外の判例、法令などを簡単に調べる。(3) 医薬の最新情報を入手する。・・・等々。

IPアドレス管理になっていますので、学内のパソコンならばどこからでも利用できます。面倒なIDやパスワードの入力は必要ありません。利用制限もありませんので、何人でも同時に、何時間でも利用できます。ぜひ有効に活用してください。学外の方でも、本学のパソコンのログインIDを取得していただければ、自由に利用できます。

接続先のアドレスは、<http://web.lexis-nexis.com/universe/>です。

日本語版ホームページは、<http://www.lexis-nexis.co.jp/>です。

日本語版ホームページからログインするときは、LexisNexis Academicを選択してください。(下図)

LexisNexis Academic
を選択



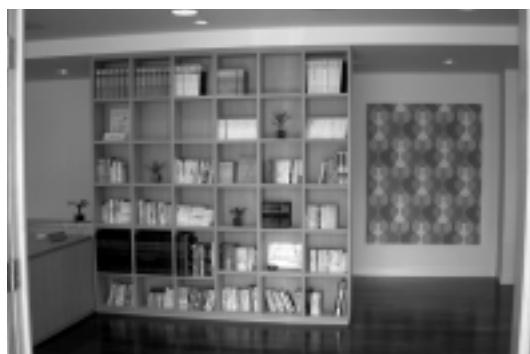
お知らせ

9月28日に竣工した「山中町セミナーハウス」(北陸大学の研修施設)の1Fロビーに、閲覧コーナーができました。主に配架されているのは、生命・医療・薬学を中心とした図書ですが、そのほか仏教・温泉・伝記なども揃えています。

なお、本学の発展に寄与され、昨年秋に逝去された、故西谷朗理事ご愛蔵の本1,116冊をご遺族の方から寄贈していただきました。これらの本は、「西谷文庫」として、山中町セミナーハウスに設置してありますので、機会がありましたら、ぜひご利用ください。



閲覧コーナー



西谷文庫



編集後記

ライブラリーセンター報の第20号をお届けします。10年前から、1年に2回ずつ発行してきました。何とか続けることができたのも、原稿を執筆していただいた先生方や学生諸君、また、ライブラリーセンター報を読んで感想をお寄せいただいている皆様のおかげと感謝しております。今後更に内容を充実させていきたいと考えておりますので、皆様のご協力をお願いします。

CONTENTS

	頁
○ IT進化の中で思うこと	1
○ 北陸大学生に薦める本	2
○ ミュンヘン大学化学・薬学部図書館	5
○ 手紙のススメ	7
○ リアルスリル・グリーン	9
○ 素養と読書	10
○ お知らせ	12

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.20 2nd-Half 2005

平成17年11月22日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
 TEL. 076-229-3021
 FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
 北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印 刷：カンダ印刷株式会社